



金田 重郎

(同志社大学PBL推進支援センター副センター長 理工学部教授)

「PBLの課題と可能性について」

10年以上前になるが、甲南大学(現在)・井上明先生とPBL(当時はそんな呼び名は知らなかった)を始めた時に、以下の本を手にした。

『ジーン・レイヴ、エティエンヌ・ウェンガー、佐伯胖(訳)、福島正人(解説)「状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加」、産業図書、1993年11月』。

レイヴとウェンガーによれば、学習とは「社会的実践の統合的かつそれと不可分の側面」である。「ごっこ」はダメであり、社会に出て「本物」をやるしかない。また、学生がファシリテータに導かれて、周辺から徐々に中核部分に入ってゆく「正統的周辺参加」モデルは、Linuxコミュニティーや大学のサークルそのものと感じた。この本にも勇気づけられて、我々は、「情報システムを学生自らが作り、納入・実運用する」実社会連携型PBLを開始した。実社会連携型PBLは多くのものを我々にもたらしてくれ、学会からの一定の評価も頂いた。

しかし、10年が経過した今、私は以下の本に惹かれる。



廃材とビー玉によるランプ(キット)が作ったモニュメント

『ジョン・デューイ、市村尚久(訳)「経験と教育」、講談社学術文庫、2004年10月』。

もともと、PBLの原点として、このプラグマティズ

ムの思想家の教育哲学があることは疑い得ない。デューイは、「経験から学ぶことの大切さ」を強調する。ただし、経験だけではダメである。学習者自身による、経験の反省的思考を通じた再構成を通じて、より高次の創造的知性が生成されるとデューイは考える。ここには、「主体的にやらせておけば成長する」「経験させれば良い」と言う無責任な態度は微塵もない。教員は、ひとりひとりの学生をしっかりと把握せねばならない。そして、「学生が経験から学べる」ように導かねばならない。「主体的」にやらせて、あとはプロジェクト管理すれば良いというものではない。考えてみれば、もともと「教育」とは寺子屋の時代からそう言うものであったのかも知れない。10年経過して、何だか、グルッと回ってもとに戻ったような気分である。

ただし、同志社大学プロジェクト科目の学生さんたちには、「経験を自ら再構成しなさい」などとは言っていない。むしろ、「プロジェクトが感動となるためには、第1に主体的参加、第2にアウトプットの水準以上のクオリティ、その双方が必要」と言っている、写真AとBは、プロジェクト科目「出会

いを楽しめる空間づくり～遊空間のプロデュース～(上野康治先生)の成果物である。廃材・ビー玉で作ったランプ(写真A)、そして、身近な方にメッセージを伝える天使(写真B)である。これらを皆で作ったイベントが終わって、既に何ヶ月も経過している。それにも関わらず、今でも、ビー玉の光(写真A)が私の目に浮かぶ。何のことはない、PBLで「感動」をもらっているのは学生ではなくて、教員である。

正当的周辺参加理論からすれば、1年間で終了するプロジェクト科目は、PBLとしては不自然である。中心メンバーを周辺部から少しずつ育てることなど不可能である。それでもなお、1年間の活動が教員にすら「感動」を残し得るのはなぜなのか。大きな要因は、ファシリテータの専門性と関与の深さだろう。でも、それだけでも無いように感じる。もうしばらく、その理由を探ってみたい。



メッセージを伝える小さな天使たち

活動報告

Activity Report

Vol. 1



2009年11月19日(木) 2009年度プロジェクト科目 秋学期ワークショップ



秋学期は、アインズ株式会社の皆様に、「レイアウトの極意—魅せる企画・デザイン」と題して、ご講演いただき、約40名の学生・教員が参加しました。よく店舗などで見かけるチラシやパンフレットも、配置場所などを考慮し、いかに消費者の目に留まるかを綿密に計算してデザインしているなどは、大変参考になる内容でした。また、ワークショップでは、グループに分かれてパンフレットのレイアウトを体験し、大盛り上がりでした。出来上がった作品は、プロのデザイナーの目線で講評していただきました。プロジェクト科目では、イベント案内などでチラシを作る機会も多く、受講生にとって大いに参考になったようです。

2010年1月16日(土) 2009年度プロジェクト科目 学生懇談会

2010年1月23日(土) 2009年度プロジェクト科目 SA・TA懇談会

学生懇談会及びSA・TA懇談会を開催しました。学期末の忙しい時期にも関わらず、各プロジェクトの受講生の代表が京田辺・今出川両校地から集まり意見交換を行いました。学生懇談会では、活動を通じて体感したプロジェクト科目の良い点・悪い点や、リーダーとしてメンバーをまとめることの難しさなど、自分たちの活動を振り返って意見を述べました。



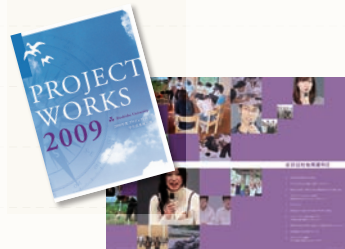
また、今回が初めての開催となったSA・TA懇談会では、SA・TAとして活動し、感じたこと、苦労した点などについて意見交換が行われました。「SA・TAへの客観的な評価を科目担当者から得られない」「担当者を受講生の間で、立場的にどう振舞えば良いのか悩んだ」「このように集まる機会をもっと設けて欲しい」など、普段あまり聞くことのできなかつた貴重な意見を得ることができ、事務局にとって、プロジェクト科目の運用の上でとても参考になった懇談会でした。皆さん、1年間お疲れ様でした。

2010年1月25日(月)・26日(火) 2009年度プロジェクト科目 秋学期成果報告会



教務主任連絡会議・プロジェクト科目検討部会から委員の先生方をコメンテーターとして迎え、秋学期成果報告会がそれぞれの開講校地にて行われました。1科目12分という発表時間で京田辺校地では、秋学期集中科目1科目・春秋連結科目8科目の計9科目が、今出川校地では、秋学期科目1科目・春秋連結科目9科目の計10科目の成果発表が行われました。今回の成果報告会では、企業や自治体に向けての提言を行った科目が目立ち、また、年を追うごとに活動が活発化している印象を受けました。2010年度はこれまでの成果報告の方法を一新し、両校地合同の開催となります。春学期は7月25日(日)に京田辺校地にて、秋学期は2011年1月23日(日)に今出川校地にて、各1日で両校地の成果報告を行う予定です。両校地合同の開催によって、成果報告会がどのように変わるのか、今から楽しみです。

2009年度プロジェクト科目 学生成果報告書



初めての試みとして、2009年度より学生成果報告書を作成することにしました。プロジェクト科目を通じて何を学んだか等、各プロジェクトの受講生に執筆してもらい、扉のコメントなども含め2009年度開講の24科目の受講生によって作成しました。表紙デザインについてもいくつかの候補の中から、受講生に選んでもらいました。報告書は、完成次第、受講生一人一人に配付します。また、プロジェクト科目の担当者や同志社大学の教職員、さらには、他大学の教育研究機関にも送付する予定です。

2010年1月23日(土) 2009年度 第1回市民公開型教職員協同講習会

2010年2月13日(土) 2009年度 第2回市民公開型教職員協同講習会

「学習環境を考える—グループワークを促す学びの空間デザイン」と題し、第1回目は株式会社内田洋行(パワープレイス株式会社)より濱村道治氏、ココヨファニチャー株式会社より高橋麻子氏を、第2回目は株式会社紀伊屋書店より牛口順二氏、丸善株式会社より矢野正也氏をお迎えし、ご講演いただきました。国内外の様々な大学の取り組み事例やご担当実績より、グループワークに求められる理想的な学習空間についてそれぞれの会社の視点から、ご報告いただきました。最新の事例の報告では、レイアウトが自在に変わる教室、発表の様子を“他人から見られる”ことを意識した空間づくりなどに加え、ネットワーク環境やグループワーク専用スペース等、設備の充実ぶりに参加者から驚きの声が上がりましたが、その一方で参加した学生からは、立派に整備されつくされた空間では、工夫の余地が無く、学生が創造力を発揮する機会を奪ってしまうのではとの声もあがりました。企業や教員が良かれと思って整備した学習空間が必ずしも学生の学習支援に繋がるとは限らない等、学ぶ立場と提案する立場での捉え方の違いがクローズアップされ、非常に興味深い議論となりました。2010年度もPBL等のグループ学習やアクティブラーニングに関するトピックスを採り上げ、年に4回程度、この講演会を開催する予定にしていますので、是非ともご参加ください(PBL推進支援センターのホームページ等でご案内致します)。



2010年2月20日(土) 2009年度 教育GPシンポジウム

『未来を切り拓くPBL—「教育」の壁を越えて—』



同志社大学今出川校地明徳館21番教室にて文部科学省大学教育・学生支援推進事業【テーマA】大学教育推進プログラムに係るシンポジウムを開催しました。スタッフを含め、120名を超えるご参加をいただき、会場は熱気に溢れました。学外からは、大学の教職員のみならず、小学校~高等学校に至るまで幅広い教育機関から、また市民の方にも多数ご参加いただきました。第1部の基調講演は、門川大作京都市長をお迎えし、「京都市から見た地域連携教育の可能性」の題名で、ご講演いただきました。第2部では、中学校・高等学校で実践されているPBLや小学校と連携して実践されたPBLの試みについて、事例報告をお願いしました。第3部では、2009年度プロジェクト科目受講生におけるディスカッションを、さらにシンポジウムでは東京電機大学より中村尚五教授をお迎えし、本シンポジウムのメインテーマである、「教育」の壁を越えてをテーマに、ご講演いただいた後に、第2部の事例報告者にも再度ご登壇いただいで、活発な議論を展開していただきました。ご来場いただいた皆様、門川市長、事例報告者、学生パネリスト、そしてシンポジストの皆様、どうもありがとうございました。2010年度も春学期と秋学期の2回のシンポジウムを予定していますので、是非ともご参加ください(PBL推進支援センターのホームページ等でご案内致します)。